

「いじめ」授業の構想と実践

神 部 秀 一

東京未来大学こども心理学部 こども保育・教育専攻

(2014年11月26日受理)

キーワード：いじめ、心的外傷後ストレス障害、N I E（新聞活用教育）、素材の教材化

1 はじめに

教育は、意図的・計画的に行われるものである。しかし、時には、教師がこれで授業をしたいと心から思える素材が突然現れることがある。そんなとき、教師は、その「素材」をどのように受け止め、どのように「教材」化すれば、手応えがあると感じる授業が作れるのであろうか。

今、「素材」の「教材」化と述べた。即ち、良い素材が手に入ったとしても、それがそのまま教材になるわけではないということである。「素材」を提示するだけでは、単なるプレゼンテーションの道具にすぎない。提示の仕方に工夫がなければ、子どもたちの思考の深まりをあまり期待することはできないだろう。ここに「素材」の「教材」化の必然性がある。その素材を使って、子どもの思考・判断・表現力を高めるためにはどのように授業を組んで行けばいいのか。生徒の心に深く刻まれる授業とするには、どのように構想し、実践していけばいいのか。扱いは方の工夫、即ち教材化が必要だと考えている。

本稿は、筆者が行った「いじめ問題」に関する授業の記録である。どのように素材を入手し、どのように教材化していったのか、また、中学生用50分の授業に組み立てていったのか。その方法を詳述し、実際に授業を実践した結果を報告する。

2 素材との出会い

2012年11月24日。A子さん(26歳)から電話が入った。

「突然電話をして済みません。神部先生には私は分からないと思うんですが、先生に、中学1年の時国語を教えてくださいました。

実は、私は中学3年の時に『いじめ』を受けていたんです。できれば先生に会って、聞いてもらいたい。話をすると気持ちが楽になるんです」

聞いて一瞬躊躇した。生半可な気持ちで関われないことを感じたからだ。

その時、私は中学3年生を担当していた。偶々12月初めの人権週間で「いじめ問題」について話をしようと考えていた。強い問題意識を持っていると向こうからやってくる、と思った。A子さんからの電話は、偶然ではなく必然だと思った。私は、次のように尋ねた。

「お聞きした話を、今の私の中学校の生徒に話してもいいですか」

「私の体験がお役に立てるなら、嬉しいです。話してもらってかまいません」

そこで、私は次のように言った。

「では、12月2日、日曜日。午前中は部活動指導なので午後1時30分にAさんの家に行きます。ご自宅を教えてください」

私は、約束を守ってA子さんの家に行った。そして、本人、親と話をし、その後、本人の希望で隣市の喫茶店で話を聞いた。話は4時間に及んだ。

3 素材の内容

以下に、A子さんの「いじめ被害」の内容を紹介する。A子さんは手紙を用意してくれたので、手紙の原文を引用しながら、筆者が聞いた話を紹介する。

手紙は、次のように始まる。

「生徒の皆さん、先生方へ。

この度は、神部先生との縁があり、いじめについて話したいと思います。いじめを受けた私が言うのも何か変ですが、いじめは絶対になくなりません。皆さんの中にも、きっといじめている人、いじめられている人が必ずいると思います。そのことを考えながら、私の話を聞いてください」

○

彼女は中3の時、男子10人くらいからいじめられた。悪口・陰口・ひそひそ話。「豚」と言われた。1学期は「悪口や陰口はしょうがないのかな。夏休みが過ぎたらなくなるかなあ」と思ってガマンしていた。しかし、悪口は一向に止まらなかった。

席替えの時、隣の生徒に「最悪」と露骨に言われた。泣きながら家に帰った。そういうことがしばしばあった。休み時間は図書館へ行った。いじめた子がいないところだから。

友達にも相談できなかった。他の生徒のいやがらせのことで色々相談していた。解決しそうな様子を見て「これは相談してもダメだな」と思った。

親に言っても深刻に聞いてくれない。先生もいい動きをしてくれない。頼れるものがない。どこにも駆け込めない、という状態が続いた。

○

「常に、授業中に私のことを見て笑っていたり、ひそひそ話をしていたり、席替えの時など、私と隣の席になったら、『最悪』などとわざと聞こえるように言ってきました。やはり、集団でいじめられると何にも言えないんです。もし、『やめて』といたら、何を

されるか分からないし、怖かったのでずっと言えませんでした」

「高校には行きたかったので、とにかく、耐えて耐えて毎日学校に行っていました。でも、学校に行くといじめられるので、朝起きた瞬間から、恐怖との戦いなんです。『今日はいじめられませんように』と心の中で祈ってました。学校へと歩いているときから、体が震えたり、涙が止まらなくなったり、『思い切って道路にとびこんで死んだら、どれだけ辛さから解放されるだろう』と思ったりしたことがたびたびありました。思い出してみると、一年間ずっと泣いていました」

○

とうとう3学期。がまんできず、担任に「助けて下さい」と訴えた。担任は「今の気持ちを、明日の帰りの会で、みんなに話さない」とアドバイスした。そして次の日、彼女は泣きながら、みんなに訴えた。

いじめはなくなった。いじめていた子はなんにも言ってくれなかった。謝って欲しかった。「謝られなかったけど、まあいいや」という感じで卒業。謝ってくれると救われたのに、と思った。

○

高校に入った。いじめられない。やっとなんか楽になった、今年の苦しさが嘘のようだ、という気持ちになった。ただ、食事に関して大きな問題を抱えることになった。

中学の時、「豚」と言われていじめられた。痩せないといじめられてしまう、と思った。「太っている人はいじめられるんだ」「だめな人間なんだ」。とにかく痩せよう痩せようと思い、一日中野菜だけだったり、何も食べないでいたりした。高校3年間満足な食事をしなかった。ヨーグルトだけ、レタスだけ。食べても大丈夫ということが分からなくなっていた。食べると太る。太るといじめられる。怖い。

食べたらずい吐いていた。外食や旅行で、親の前では平気で食べて、その後トイレで吐いた。だから親は知らなかった。プライドがあった。隠していた。

○

「その頃から私は、摂食障害というものになりました。

コンビニで一人きりでは食べられない程のパン、おにぎりなどを買って、とにかく食事をするというより、食べて食べて食べまくりました。その後は、すぐに吐いて、胃の中に入った食べ物を、胃酸が出るまで全て吐くだけでした」

○

吐くために大量のパンやおにぎりを買った。毎日のことで、量がすごい。トイレでは詰まってしまう。2重のビニール袋に入れて、コンビニまで捨てに行く。160センチ54kgが、40kgになった。

弟が「お姉ちゃんもっと太った方がいいよ。ちょっと気持ちが悪いよ」と言った。

その言葉を聞いて、彼女は「ちょっと誇らしい」という気持ちになった。

専門学校を卒業して就職した。21歳。正社員で働いていた。ある日、突然作業中に倒れた。顔面麻痺。しゃべれない。歩けない。トイレに行けない。寝たきり。妄想・幻覚。目がぐるぐる回った。表情が変わった。普通の人と同じ事ができなくなった。食事をすること、歩くこと、話をする事、眠ること、全て不自由になった。

足が回復しても、今度は口にもものが入らない。ソフクリームを目の前にしても口が開かない。

こうして心の問題が表面化し、心療内科へ通院することになる。

○

「摂食障害から、負の連鎖のようにいろいろな病気が出てきました。顔面麻痺・歩行障害・不安神経症・対人恐怖症・強迫性障害・鬱・無気力・自殺願望。

いじめというのは、されている時よりも、後の方が辛いんです。辛い時は、心にふたをして、がまんのふたをして、すべて押さえつけています。そうして年月がたち、その押さえがきかなくなった時、私みたいに心の病になってしまうんです」

○

普通に食事が出来るようになるまで5年かかった。

今年の3月11日。震災から一年経って、色々ところでがんばっている人たちの映像が流れた。それを見て、自分も一歩踏み出さないと何も変わらない、

このままではダメだ、と思うようになった。自分のことを見つめ直すようになった。

摂食障害の大本は何だ。ダイエットが危ないんだ。痩せようと思ったダイエットのきっかけ、原因が中学時代のいじめにあった、と思い当たった。こういう状態になった根本的な問題は、明らかに中学校の時の「いじめ」だった。そこをしっかりと見つめた。そこで、いじめていた人たちに電話をかけた。そういう勇気を出した。

○

「いじめの理由を聞いたら、『特に理由はなく、面白がってやっていた』と言われました。その人は泣きながら謝り続けてくれて、土下座までしてくれたんです。その人の気持ちが十分分かりました。その当時の担任の先生にも来てもらい、先生も謝ってくれて、何か一つ心のとげが抜けたような気がしました」
「ここに来るまで10年はかかってしまいました。だからこそ、私みたいな人が出てきて欲しくないんです。いじめる側も、いじめられる側も、人として一番大切なのは、相手のことを思うことなんです。ただそれだけなんです」

「いじめの解決法は、正直言って分かりません。これからはいじめは続いていくと私は思っています。ちゃんとアドバイスが出来なくて申し訳ないんですが、一つ、生徒さん、先生方にもお願いがあります。生徒さんは目を閉じてください。絶対目を開けないでください。

今現在、自分はいじめられている、嫌がらせを受けている。少しでも思い当たる人がいたら、勇気を出して手を挙げて下さい。

もし、手を挙げる生徒さんがいたら、先生はしっかり見て下さい。ただ、それだけなんです」

○

「流動食を口に入れるのも薬を飲むため。今も毎日、20錠の薬を飲んでます」

「中学生の思い出は強いんです。私みたいな思いをしないほしい。『いじめ』は、されたらこんなに辛いんです。されている時よりも後の方が辛い。『いじめ』が終われば終わりじゃないんです」

以上の話をA子さんから直接聞いた。思った通り実に生々しい話だった。授業化して生徒に考えさせるのにふさわしい価値ある素材であると確信した。

4 素材の特性と指導の方針

教材化即ち授業化という観点で素材の分析を行う。

本素材には、次の3つの特徴が挙げられよう。

①実話である。内容が具体的である。テレビの中の話ではなく、目の前の教員の教え子の話である。話に説得力があると思われる。

②いじめの人、いじめられる人、周りの人、家族、教師が登場している。「いじめ」を取り巻く人間関係が明確である。一般化できる。

③「いじめ」受けた人の、その後が語られている。「いじめ」はその後のほうが辛い、という生徒にとって新しい知識を与えられる可能性がある。

これらの特徴を踏まえて、教材化を図る。授業の構想に際して、以下の4点の方針を立てた。

①「いじめ」授業に対する心の構えを作らせてから、授業を行う。

そのために、授業実施の前、Aさんの概要を知らせて感想を書かせる。また、新聞紙上の「いじめ」記事を切り抜かせ、感想を書かせておく。

②実話という特徴を生かす。

Aさんの言葉を散りばめながら授業を進める。集中力が途切れないようにする。

③いじめを取り巻く人間関係を明示し、特に「周りの人」の問題意識を高められるような授業にする。

自分は「いじめの人、いじめられる人、周りの人」のどの立場かを考えさせる。いわゆる類型化を用いて自分自身を振り返らせる。

④生徒の感想を生かす。

Aさんの話を聞いた後の感想文、新聞記事へのコメントから、授業に使える生徒の感想を拾う。「いじめは面白い。悪口は盛り上がる」等の言葉を拾いたい。生徒の心に一步踏み込んだ授業にするためである。生徒から出ないときは、教師が提示する。

5 道徳（人権学習）授業の実際

本授業は、2012年12月初旬、3年A組・B組・C組、それぞれ約30名の生徒を対象に実施した。

以下に掲げる3年A組の授業は、12月13日（木）第2校時に、群馬県NIE推進協議会公開授業として実施した。新聞社の記者及び県内NIE実践指定校の担当教員が参観した。

なお、生徒には、本授業が取材されることを話し、写真に写りたくないという生徒1名については、記者に配慮を求めた。

5.1 指導計画及び指導日

全2時間扱いとする。第1時を第3学年集会という形をとって「いじめ問題」を提起する。その後、第2時にそれぞれのクラスで授業実践を行う。授業者は筆者である。

○第1時 平成24年12月3日（月）第5校時
学年集会「いじめ問題（Aさんの話）」

○第2時 平成24年12月初旬
各クラス「いじめについて考えを深める」

5.2 主題

「いじめについて考えを深める」を主題とする。

5.3 事前指導

12月の人権集中学習週間で「いじめ問題」の授業を行うことを生徒に予告した。11月中旬に、その授業に向けて「いじめ」に関する新聞記事の切り抜きと200字の作文を課した。これは、Aさんから連絡が来る前のことである。また、11月下旬には、全校集会で、校長から全生徒へ人権に関わる講話があった。これを受けて、各学年で人権集中学習に取り組むことになる。筆者は、第3学年の主任という立場で、人権学習を行う。

5.4 第1時の概要（12月3日（月））

Aさんの話を聞いた翌日の12月3日（月）、第3学年全体の集会をもった。いじめ問題について理解

を深めること、今後のクラス授業に対する心構えを作ること、生徒感想の中から授業で使用できそうなものを拾うことを目的とする。20分くらいA子さんの話を聞かせ、その後クラスに戻して感想を書かせた。

ここで以下の感想を得た。A子さんの話を生徒が真剣に聞いていることが分かった。指導者自身が、この話を伝えたいと思える題材は、しっかり生徒に伝わっているということを確認した。

○自分がいじめられたという経験がなく、いじめについての考えが甘かった。いじめが終わってもなお苦しいのだと分かった。そこまで重く受け止めていないことに気づいた。

○いつもはうとうとしているけど、今日の話はひどすぎてびっくりした。

○相手の軽い気持ちのせいで、10年間も苦しみ続けなくてはいけないのかと、怒りさえ覚えました。見て見ぬふりも共犯ということをお忘れず、行動していきたいと思っています。

○なかなか聞ける話ではなく、とても深い話で、リアルで、怖くなった。いじめられている話は、正直、探せばどこにでもある、それほどいじめが多いということなんでしょうけど、終わった後のことは初めて耳にするのでいじめの怖さが身にしみた。

○今日の話で、自分がどれだけひどいことをしたのか実感した。

○私が辛いとき、なんで私だけ…と思っていたけれど、この人の話を聞いて、辛いのは私だけじゃないんだ!と思うことができました。私たちのために神部先生を通して自分の体験を話してくれたことに感謝しています。

○今日の神部先生の話聞いて、この学校のいじめに対する考え方はだいぶ変わったと思います。少なくとも僕はとても衝撃を受けました。

これらの感想の中で、次のY子の感想に少なからずショックを受けた。同時に、この意見を紹介することで、授業を深くすることができると感じた。授業の終末部、考えを深める部分で使用することにした。

「A子さんが、この話を私たち生徒に話してもいいと

仰ってくれたことに、すごく感謝しています。でも、私は、このような話を先生方が話してくれてもイジメをしている生徒は、一生イジメをやめないと考えます」(Y子)

5.5 第2時(クラスごとの授業)の詳細

5.5.1 授業のねらい

「いじめ」の残酷性や「いじめ」による心的外傷後ストレス障害を知り、「いじめ」に対して「見てる人」から「助ける人」になろうとする心情を育てる。

5.5.2 導入「新聞記事の紹介」(導入7分)

導入での配慮事項は、次の3点である。①学年集会での話の感想を紹介すること。②宿題の新聞記事を紹介すること。③新聞記事の内容からA子さんの話へと、自然な流れを作ること。

学年集会後に、真面目に一生懸命考えて感想を書いてくれたことへの感謝の気持ちを表した後、宿題として課しておいた新聞の「いじめ」記事とその感想を8本紹介した。全国や本県でのいじめの件数、いじめの内容程度、訴訟例、親の苦悩、文科省の対策等の観点から選んだ。最後の記事で、「体験者の話が聞きたい」という生徒の感想をもってきて、A子さんの話へ無理なく入れるような構成にした。

使用した記事は、以下の通りである。括弧の中は生徒の感想である。

①いじめ認知14万件(産経:H24.11.23)

半年間で昨年度の2倍を数えた。

②都道府県で差160倍(上毛:H24.11.23)

鹿児島県では6人に1人。(とすると、自分のクラスでは5人くらいになる。)

③いじめ認知550件(上毛:H24.11.23)

本県では、4月～8月の5ヶ月に550件。

④リストカット・けんか強要(産経:H24.11.23)

文科省では、278件の内、4割程度がすぐに警察に通報すべき内容、としている。

⑤いじめでPTSD認定(日経:H24.11.10)

石川県加賀市、女兒と保護者が市と同級生の保護者に損害賠償の訴え。金沢地裁小松支部は因果関係を認めて700万円の支払いを命じた。

⑥心の穴日増しに大きく（読売：H24.11.6）

品川・中1自殺、父親、無念語る。「いじめという言葉でごまかせる話ではない。いじめは人権侵害で犯罪」

⑦いじめ対策1000人増員（上毛：H24.8.31）

カウンセラー・ソーシャルワーカー・子供の心のケア充実1000人増員。（文科省も本気だ。）

⑧いじめられている君へ（朝日：H24.11.14）

逃げて。居場所は必ずある。（このようなメッセージを届けることが重要だと思う。評論家でなく、体験者の声が聞きたい。）

5.5.3 A子さんの手紙の紹介（展開①8分）

学年集会で概要を話したが、A子さんからの手紙は紹介しなかった。それをこの場で紹介した。生徒が、この手紙の内容にかなり興味を持っているということは、感想から分かっていた。ある程度知識を与えておくと、集中して聞かせられることが確認出来た。

5.5.4 いじめの人間関係図とA子さんからのメッセージ（展開②18分）

A子さんの話から発問を考えて、生徒に考えさせるという方法もあるが、そうしなかった。主体的な学びを成立させるには、自分から考えるという方向性が必要だと考えた。そこで、筆者は次のように投げかけた。

——いじめを受けて苦しみ、今漸く立ち直りつつあるA子さんから、アドバイスをもらいました。Aさんは、それぞれの立場の人に、どんなアドバイスをしてくれたのでしょうか——

「いじめられている人、いじている人、周りの人、先生、家族」の五者に、Aさんはどんなアドバイスをしてくれたのか、想像させたのである。

もちろん、この発問は、最初から考えていたわけではない。Aさんに直接聞いてはいない。4時間に及ぶA子さんの話の中から、筆者がそれぞれに対するA子さんの言葉を拾ったのである。

A子さんからのアドバイスをまとめた段階で、Aさんに電話をした。そして、追加できるところは追加してもらい、アドバイスの中身を確定した。A

子さんには、授業の展開についても説明し、了解をもらった。

黒板に、①いじめられている人、②いじている人、③周りの人、④先生、⑤家族の色画用紙を貼って、いじめをとりまく人間関係を図示した。生徒には、Aさんが上記①～⑤の人に対して、どんなアドバイスをしたかを想像させ、ワークシートに書かせた。各人がワークシートを完成させた頃、次のように指示した。

——では、次に班で話し合ってみましょう。1班は、「いじめられている人」に対するA子さんのアドバイスをまとめてください。2班は「いじている人へ」、3班・4班は「周りの人へ」、5班は「先生へ」、6班は「家族へ」のアドバイスをまとめてください——

このようにして、それぞれにAさんがどんなメッセージをくれたのか、意見交流をさせた。

班のまとめ（◆）は、小さなホワイトボードに書かせて黒板に貼るように指示した。その後、筆者が、実際のA子さんからのアドバイス（◇）を順番に紹介していった。

<1班>（いじめられている人へ）

◆自分1人で悩まずに、周りの人達と一緒に解決してもらおう。

◇「伝わるまで誰かに相談して。先生や友達に。校長先生でもだれでもいいから聞いてもらって。分かってもらうまで、ちゃんと説明して。伝わる場合と伝わらない場合がある。たいしたことじゃないと返されてしまうことがある。伝わるまで、伝える努力をして。こもっていないで。もうだめだと思ったらだめ」

<2班>（いじている人へ）

◆なぜ大した理由もないのにいじめるの？やっている時は自分は楽しいかもしれないけど、やられている方の気持ちを考え、それから行動すべき。

◇「……ウーン。ウーン。（言えない。言葉が出ない。）神部先生、いじている人に『やめて』というのは大変なんです」

<3班・4班>（周りの人へ）

◆周りの人は団結し、一人ではなく、みんなでよりよい方向に転換していけるように考えて行動しよう。

◆現実から目をそらしていませんか？いじめられている子の悪いところだけを思い浮かべ、だからあの子はいじめられるんだ、と理由付けていませんか？
いじめられている子の味方になることができますよ。

◇「勉強も大切だけど、勉強よりも、人間としてそれどうか、ということを考えてほしい。こう言われたら嫌だな、という人の気持ちを分かってください。

そこまで大変じゃないと思わないで。いじめを軽くながさないでほしい。本気で考えて欲しい。心が折れて自殺してしまう人もいます」

<5班> (先生へ)

◆いじめられている人は、小さな事でもいじめと受け取って、相談しているから、しっかりと向き合う。
◇「いじめられている人は、何かを出している。それを感じてほしい。自分からは言いづらいし、先生の所に行きづらい。二者面談でも隠しちゃうことがある。『最近何かあったの、どうしたの』と声をかけて欲しい。特に保健の先生は聞いてあげて。

人として基本的なことはきちんと指導してほしい。だめなものはだめ。いいことはいい。勉強よりも大事。下手に動くとその子がまたいじめられてしまうということも考えて」

<6班> (家族へ)

◆子供の話をしっかりと受けとめ、一緒に考えて、戦ってあげる。

◇「家族に理解してもらえないのが一番辛い。いじめは、大変なことだということを理解してやってください」



【A子さんからのメッセージを紹介】

5.5.5 自分を振り返る (展開③10分)

いじめの人間関係の中で、自分はどこに位置しているのか、振り返らせた。③「周りの人」を「あおる人、見ている人、助ける人」に分け、以下の5つの中から自分に一番近い番号を選ばせ、理由を考えさせ発表させた。

ア	いじめられている人	結果 (3人)
イ	いじている人	結果 (3人)
ウ	あおる人	結果 (5人)
エ	見ている人	結果 (23人)
オ	助ける人	結果 (1人)

(※複数回答あり)

ここまでで、「いじめ」に関する考えは、かなり深められたと考える。しかし、もう一押しして、生徒個々の心の内面に迫る必要がある。

5.5.6 教師によるまとめ (終末7分)

まとめの話として、まず、先述した学年集会時のY子の感想を紹介する。Y子の感想「イジメをしている生徒は、一生イジメをやめないとします」、この感想にちょっとショックを受けたことを正直に話す。更に、人間の心の多面性について教師が話をする。ここが重要な所なので、努めてじっくりゆっくり語った。

「イジメは面白い」「悪口は盛り上がる」、こうした感覚や体験を認める話をする。教師の体験談として、子どもの残虐・残酷を話した。

「ひつぱれる糸まつすぐや甲虫」(高野素十)という句を見ると思い出す体験である。甲虫の首に糸を付けてぐるぐる回す。甲虫が飛ぶ。それが面白くて、首に糸が食い込むまでぐるぐる回すのである。子どもは平気でこういうことをする。甲虫がかわいそうだ、という感覚は、少し成長しないと出てこなかった。

また、「傍観者の利己主義」(芥川龍之介『鼻』)ということについて、以下の内容をかいつまんで語って聞かせた。

——人間の心には互に矛盾した二つの感情がある。勿論、誰でも他人の不幸に同情しない者はない。所がその人がその不幸を、どうにかして切りぬける事

が出来ると、今度はこっちで何となく物足りないような心もちがする。少し誇張して言えば、もう一度その人を、同じ不幸に陥れて見たいような気にさえなる。そうしていつの間にか、消極的ではあるが、ある敵意をその人に対して抱くような事になる。——内供が、理由を知らないながらも、何となく不快に思ったのは、池の尾の僧俗の態度に、この傍観者の利己主義をそれとなく感づいたからにはほかならない。

他人の不幸をかわいそうだと思わない人間はいない。しかし、本人がその不幸を乗り越えると何となく物足りない、というか、またその人を不幸に落としたい気持ちになる。我々は、確かにこうした気持ちをもっている。

教師が、自らの体験と自らの心の有り様を見つめて、偽りのない話をしなければならぬ。そうしなければ、生徒には表面的な浅い考えしか期待できないと考えている。

「このような、『子どもの残虐性』とか『傍観者の利己主義』を克服しなければ、いじめは一生つづくことになるだろう。いじめを止めるためには、今回のA子さんの『いじめはこんなに辛いんだ。いじめが終わっても終わりではない』ということを知らなければならない。知識をもっていると、行動にブレーキがかかる。気持ちを理解し共感するだけでなく、実感として分からなければ、自分のこととして考えることは出来ないだろう。行動に変化が起これないだろう」

このように結んだ。

6 授業の感想（3年A組 28人全員分）

3年A組28人全員の感想を掲げる。

①いじめについて深く考えたら、私はひきょうな人なんだなと思ひ知った。いじめは言葉に出して伝えないと、そのいじめは絶対になくなるんだなと思った。

②僕は改めていじめは絶対にしてはいけないと思いました。あと、いじめは思っていた以上にこわいことだと思いました。

③いつもイジメのことを話すときは、いじめられている子のことしか話さないけど、いじめている子、周りの人、先生や家族のことも話し合えてよかった。

④イジメは人としてよくないことだと思うので、僕はエの人からオの人になりたいと思っています。

⑤イジメを受けている本人の手紙を聞いたので、すごく生々しかった。イジメはあってはならないことだと思った。

⑥今回の授業は、何が何だか分からなくなった。僕は、何をやっているのか。自分という立場が怖くもなってくる。自分はやっている側だったのだから、色々なことを考えさせられるような授業だった。自分の性格は変えようとして変えられるものではない。その中で、どれだけ努力できるかが問題だと思う。

⑦イジメは、いじめた人がやめて終わりになったとしても、いじめられた人にとっては一生終わらないということがよく分かった。また、イジメは見ている周りの人や先生・家族みんなで解決することが大切なんだなと思った。

⑧いじめは一人で行動しても解決しないが、それでも行動をし始め、他人に相談することが大切だと思った。イジメの危険性を改めて実感することができてよかった。

⑨いじめは一人では解決するのは大変なんだなと思いました。まずは相談できるような雰囲気作りができたらいいなと思いました。そして、いじめが起かない雰囲気作りができたらいいなと思いました。

⑩今では自殺にまで追い込んでしまうような悪質ないじめが起きています。気に入くないやつがいた程度で、人の精神まで傷つけて、この先の人生まで台無しにしてしまうのは、とっても重大な犯罪だと思います。親たちの話を聞いてみると、今のいじめは度が過ぎてるね、と話していました。いじめは、いじめる方もいじめられる方もやった後、いい気分にはならないと思うので、もうこれ以上増えてほしくないです。

⑪A子さんの手紙の内容を聞いて、いじめについての理解が深まった気がします。自分は関係ないから知らない振りをするとかじゃなく、味方になるなり、

してあげられることがあるんだと思い、いじめが少しでもなくなればいいなと思いました。

⑫今回の人権学習でいくらか気持ちが楽になった部分があります。いじめがなくなるということは、何をしても無理だと考えていた自分には刺激的でした。今日の学習を通して、みんなにもそういうことが分かったと思うのでよかったです。

⑬新聞の切り抜き記事から、6人に1人がいじめにあっていくというのがびっくりした。A子さんの手紙で、いろいろな人にアドバイスがあったけど、私ならアドバイスじゃなくて「何である時、～したの?」とか言っちゃおうと思う。世界からいじめがなくなってほしいけど、私もなくなることはないと思った。でも、少なくなればほしいと思った。

⑭今日は色々なことを考えられました。過去の自分と向き合うこと、今まであまり深く考えなかった人の立場のこと、様々な思いがあり、その思いを自分の中で整理するよい機会となりました。

⑮いじめは、人の心をそのままに映し出したものだと思います。弱い部分があるままに出てしまっているのだと思います。それでも、勇気を出して、その弱いものに打ち勝つことができれば、みんな幸せになるし、それは、誰にでもできることだと思います。A子さんは、いじめはなくなると言いました。私もそう思います。なぜなら、人の心には必ず弱い部分はあるし、馬が合わない人や、自分の思い通りにならないことは、私たちの身の回りに沢山あるからです。それで、不安が爆発して、してはいけないことをしてしまうのだと思います。でも、私たちの周りには、たくさんの人々がいます。その人々がそれを無視せず、すぐにひきとめてくれるなら、安心して世の中になると思います。一人ではなく、仲間がいれば、しっかりと生きていけると思います。

⑯今日の神部先生の話聞いて、どのような行動がいじめの解決につながるか、という話に共感した。

⑰いじめられている人やいじめている人の気持ち、そして自分はどの立場の人間か、なんて考えたことがなかった。いじめについて考えても、いろいろ複雑で難しかった。この授業で、完全にいじめは消え

なくても少しずつなくなっていけばいいと思います。

⑱いじめは、こういう話を聞くだけでなく、自分たちがいじめを自覚して、動くことが大切だと思った。いじめは面白いという理由だけでやっているんだと思うと、どうしてそれだけでいじめようとするのかという疑問が生まれた。

⑲私は今日の授業を聞いて、すごく涙が出てきました。今までの自分の嫌だったことなどを思い出して、その時はただ悲しくて、どうして良いか分からなくて、誰にも相談できずに一人で悩んでいました。でも、今日の授業で、一人で悩まなくて良いという事が良く分かりました。私がどの立場の人になるか分からないけど、正しい人との接し方ができれば良いです。

⑳改めていじめは重大な問題だと思いました。ほんの面白さや軽い気持ちから始まり、時に命を奪います。また、いじめる人、いじめられる人だけではなく、それ以外の人たちも解決に向けて努力しなければならないと思いました。

㉑いじめている人といじめられている人では、自分の心の感じ方が全然違うということが分かった。

㉒自分を見つめ直すことはいいことだと思った。

㉓いじめは、周りの人がどう行動するかが大きなポイントだと思った。見ているのはいじめているのと同じだということを改めて感じた。また、友達の意見を聞き、自分と同じ考えをもっていたりして、勉強になった。いじめは、いじめている人とされる人だけでなく、みんなが考えなければならないことだと思った。自分も勇気を出して「やめなよ」と言える人になりたい。

㉔とても深く考えさせられるような内容で、また、たくさん疑問も浮かぶ内容だった。改めていじめについて知ることができた。誰かの言うとおりに、すべての学校でこういう授業をしても、全員が本当に理解できなければ、いじめは続くと思います。

㉕人権の話聞いてよかったです。

㉖たくさんの記者の人が来ていてとても緊張しました。A子さんは自分たちへ色々なことを教えてくれてありがたいと思いました。

㉗今日の授業を聞いて、いじめは、しても大変なん

だなあと思いました。

⑳いじめは犯罪だということ。これは、人権問題の中でも、まず最初に認識すべきことだと思った。

7 終わりに

7.1 今後の「いじめ問題」指導に関する示唆

生徒の感想の中に、今後の指導や授業へのヒントがあると思われる。3学年全生徒の言葉の中から今後の指導に生かせそうなものを挙げる。

①周りの人がどう行動するか具体的に教える。

「何をすればよいのか分からない」という意見がある。以下の感想から具体的な行動を抽出できる。今後の指導の参考になろう。

「いじめを受けている人は、見られているだけが一番辛い」「あなたが一言でも声をかけてあげれば何かが変わる」「イジメは見ている周りの人や先生・家族みんなで解決することが大切」「言葉に出して伝える」「大丈夫?」「やめなよ」「自分たちがいじめを自覚して、動くことが大切」「してあげられることがある」

②何人かで解決するように持っていく。複数で行動することを教えるとよい。

「次は私がターゲットにされてしまうのではないか、という恐怖心がある」「注意したとしても逆に責められるのではないか、無視されるのではないか、のような不安があって何も言えなかった」「やめなよと言いたいけど、のどの部分で止まってしまう感じだった。何人かでなら助けられるかもしれない。一人だったら多分できない」

③本気で対処するように指導する。

「たまに『やり過ぎだからやめなよ』とは言うけど、それは笑いながら言ったりする。だから、あんまり本気に受け止めてなかったりした」

④いじめの犯罪性を教える。

「知らんぷりするのも立派ないじめ」

いじめには、次に該当する犯罪が見て取れるという。

「暴行罪、傷害罪、脅迫罪、強要罪、窃盗罪、横領罪、強盗罪、恐喝罪、逮捕・監禁罪、器物損壊罪、

名誉毀損罪、傷害致死罪」(篠木潔)

レイフ・クリスチャンソンの『わたしのせいじゃない～せきにんについて～』(岩崎書店)は、これらの犯罪を説明するのに適していると思われる。

⑤身近で実際の話素材にする。生徒はよく聴く。真面目に考える。

「生々しい話」「評論家の話ではなく、体験談が聞きたい」

⑥先生や家族を含めて、いじめを取り巻く人間関係を考えさせる。

「いつもイジメのことを話すときは、いじめられている子のことしか話さないけど、いじめている子、周りの人、先生や家族のことも話し合えてよかった」

⑦いじめの怖さを伝える。

「イジメは、いじめた人がやめて終わりになったとしても、いじめられた人にとっては一生終わらないということがよく分かった」

⑧「いじめ」授業は、「いじめられている人」を選んでいた生徒を勇気づける可能性がある。

「今日の授業で、一人で悩まなくて良いという事が良く分かりました」「今回の人権学習でいくらか気持ち楽になった部分があります」

7.2 まとめ

参観者の感想の中から、本時の授業方法に関わる指摘を抜き出す。

①A子さんからのメッセージを入れたこと

「畳み掛けるように、実際の真実の言葉をベースに授業が行われているので、説得力がありました」

②人間関係図

「あの5色の人型や、小黒板は、ぜひマネしたいと思いました。プリントに書いて考える際に、いじめている子・いじめられている子・見ている子、までは一般的ですが、そこに教師と家庭の2つの視点を取り入れたところが秀逸でした」

③最後のまとめの言葉

「私の目の前の生徒は、自分が以前いじめる側にいたということを書いていたのですが、建前の授業であれば、ふつうそんなことは書かないだろうと、

見ている側の人間だったなどと逃げるのだらうと思
い、素直に以前の自分を振り返っていた」

この授業を参観した教師に依頼されて、2013年12
月、県内のB小学校で本授業を行った。導入7分を
削除して、小学校6年生版の授業とした。授業後、
参観した教頭先生から、

「このクラスからは、いじめをする子どもは出ませ
ん」と、この授業を評価するお言葉をいただいた。

【付記】

本稿は、私家版『教育実践集～私の国語教室～』
及び「福分堂教職ネットマガジン」(Web上の有料
マガジン)に掲載した実践記録を基に、素材の教材
化や授業方法という観点を取り入れて、新たな構想
の下に加筆・修正したものです。

本授業は、2012年12月13日、群馬県NIE実践指定
校の公開授業として実施しました。翌日の読売・産
経・上毛・東京の各新聞に授業の様子が取り上げら
れました。上毛・産経・読売の記事を、資料として
添付します。

【謝辞】

本授業を真剣に受けてくれた生徒の皆さんに心か
ら感謝申し上げます。私にとって最も忘れがたい3

年生の皆さんでした。

また、一昨年の授業公開時に大変お世話になりま
した太田市立強戸中学校の長谷川正彦校長先生、昨
年・本年度と大変お世話になりました山野直樹校長
先生に心より感謝申し上げます。山野校長先生には、
強戸中学校での実践を論文にまとめて公開すること
及び当時の新聞記事を掲載することに対して、ご快
諾を頂戴いたしました。本当にありがとうございました。
同校の伏島均教頭先生には、3年間のNIE授
業に関しまして格段のご配慮を賜りました。ここに
記して、厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

最後に、A子さん。葉の量が大幅に減り、どんど
んお元気になっていくご様子で嬉しいです。お陰様
で価値ある授業を実践することができました。本当
にありがとうございました。

【文献】

- 芥川龍之介 『鼻』 青空文庫より引用 (2014年11月25日
確認)
篠木潔 「犯罪」に該当するいじめ行為 『教職研修2012
年11月号No.483』 (2012.11) 教育開発研究所

【資料】 新聞記事

(2012年12月14日 上毛新聞・産経新聞・読売新聞)

いじめのつらさ感じて 太田・強戸中で公開授業

NIE(教育に新聞を)の実践校と
して新聞を積極的に活用している太田
市立強戸中(長谷川正彦校長)で13
日、いじめをテーマにした3年生
道徳などの公開授業が行われた。
いじめの授業では、国語担当の神部
秀一(教諭前)が新聞各紙のいじめ関連
記事を紹介し、中学校のいじめが原因
で、今もストレス障害などに苦しんで
いる教子(子)のA子さん(26)から今月2
日、直接預かったという長文のメッセ
ージを読み上げた。
「中学時代の思い出は強いです。
私みたいな思いをしないで……」
生徒らは、Aさんがいじめの当事
者や周囲に何を求めているかを話し合
い、発表したり写真。
先生が直接取材した現実を客観的に
示し、生徒が考えろという珍しい授
業。

神部教諭は「相手の気持ちを共感、
実感できない」と思いやりの気持ちは生
まれぬ」と振り返った。



【産経新聞】(2012.12.14)

豊 新 陽

いじめ 新聞記事で考える 太田・強戸中 NIE公開授業



各道に分かれていじめについて考える生徒たち

学校教育に新聞を活用するNIEの公開授業が13日、太田市天良町の市立強戸中（長谷川正彦校長、267人）で行われ、神部秀一が2組を導く新聞記事を読み、一教諭（57分）が、道徳の時間を削り、いじめられる側、周

りがおそれるよう行動する生徒28人は、教科書無しで考えなければならぬ。6班に分かれて考で考えなければならぬ。出席し、12人の見学者に見守られた。平塚愛永さん（15）は、「いじめを無くすには、自ら動いていかなければいけないと感じた」と話した。

同中では、2年生の教室でも中村一寿教諭（34）の国語の授業が公開された。

【読売新聞】(2012.12.14)



「いじめ」について話し合う生徒

新聞でいじめを考える

太田 強戸中

新聞を活用した教育を取り巻く人たちの立場になっていじめ公開授業が13日、太田強戸中で開かれた。市以外の教諭ら約10人が道徳や国語の授業を見学し、効果的な手法を探った。

さん曰は、相手を傷つけるばかりで、つても良いことがない。あつためてそう思ったと話していた。公開授業は県NIE推進協議会（会長・所沢潤群馬大大学院教授）と、NIE実践校に指定されている同校が連携して開いた。

3年生の教室では「いじめ」を題材にした道徳の授業を実施。生徒はあらかじめ関連する新聞記事をスクラップし、意見をまとめてから臨んだ。

担当の神部秀一、教諭57人が、中学時代にいじめ被害に遭っていた元教え子の手紙を紹介。生徒は、被害者「加害者」、加害

【上毛新聞】(2012.12.14)